『ジャン・サントゥイユ』における「ドレフュス事件」
－プルーストと中動態の世界（2）－
« L'Affaire Dreyfus » dans *Jean Santeuil* : Proust et la voix moyenne (2)

青柳　りさ
AOYAGI Risa

はじめに

『失われた時を求めて』の世界は、「見る／見られる」という能動と受動の世界ではなく「見える」という中動態の世界である。「プルーストと中動態の世界(1)－「ある親殺しの感情」をめぐって－」[1]においては、この「見る／見られる」世界から「見える」世界への転換の契機となる出来事として、アンリ・ヴァン・ブラレンベルグによる母親の殺害（1907）と、この事件に寄せてプルーストが「フィガロ」紙に寄稿した記事、「ある親殺しの感情」[2]をとりあげた。プルーストは、母親殺しのアンリをオイディプスとオレステスになぞらえ、「より高度な正義を回復するためには、あの親殺したちは無意志で罪を犯したものゆえ、その者たちの名誉は称えられ、神前に捧げられねばならぬ」[3]と断言する。そして、『失われた時を求めて』冒頭の「就寝劇」（1913）では、「私の悲しみはもはや罰すべき過ちではなく、意図せざる病とみなされ、私には責任のない神経症状であると公式に認められる」[4]。作品の原点に「意志の欠如」がある、そして意志の欠如を認められた主人公を語り手として、『失われた時を求めて』は始まる。最終章『見出された時』において語り手は「意識的な、意志的な形では、作品は実現されない」[5]と述懐する。

未発表原稿、『ジャン・サントゥイユ』(1895-1899)には、『失われた時を求めて』のなかにみられるテーマやエピソードのかなりの部分がすでに認められる。『失われた時を求めて』は、『サント=ブーヴに反論する』からではなく『ジャン・サントゥイユ』から生まれたのだ、とピエール・クララは解説する[6]。しかし『ジャン・サントゥイユ』が完成をみることはない。プルーストを『失われた時を求めて』(1913-1922）へと「離陸」させる[7]のは、強い意志をもって行動する「ジャン」から、意志の欠如を自認する「語り手」への主人公の転換である。そして、『失われた時を求めて』に比して、『ジャン・サントゥイユ』の主人公（ジャン）が最も能動的であるのが、「ドレフュス事件」とのかかわりである。『失われた時を求めて』において語り手は「ドレフュス事件」に関して一切自分の立場を明らかにしない。本論では、『ジャン・サントゥイユ』における「ドレフュス事件」を検討し、そこからプルーストがどのように「離陸」してくかを検証したい。

1　「ドレフュス事件」がとりあげられる断章

『ジャン・サントゥイユ』のなかで、ドレフュス事件がとりあげられる断章は全部で13章である。「レヴェイヨン家の人々(Les Réveillons)」[8]の３つの断章と、「«事件»をめぐって（Autour de « L'Affaire »)」[9]の10の断章である[10]。

以下に断章のタイトルと、相当すると考えられる裁判、審理、事件にかかわる人物を整理した。ドレフュス事件にかかわる裁判、審理、議会の決議等は

［キーワード］フランス文学　『失われた時を求めて』　國分功一郎　A la recherche du temps perdu　ポランスキー

多々あるが、事件の中心となるのは、1894年12月にドレフュスに終身流刑の判決を下したパリ軍法会議、1898年２月にゾラに3000フランの罰金と１年の禁固刑を言い渡したゾラ裁判、1898年11月から1899年６月にかけてのドレフュス判決についての破棄院の審理、1899年８月から９月にかけてのレンヌ軍法会議である。

「レヴェイヨン家の人々」には33の断章があるが、そのなかの３つの断章にドレフュス事件について言及される箇所がある。

「«事件»をめぐって」にとりあげられていると考えられる裁判、審理は、1898年のゾラ裁判と1898年から1899年の破棄院の審理の二つである。

「レヴェイヨン家の人々（Les Réveillon）」

断章タイトル	相当するドレフュス事件	事件に関わる人物
レヴェイヨンにて、リュスタンロールとエクスペール＝フォンタンの出会い A Réveillon, rencontre de Rustinlor et d'Expert-Fontin	1898.7.7 議会におけるカヴェニャックの演説	エステラジ、メルシエ、ピカール、ドレフュス、ルトゥルヌール（モデルはブリッソン、カヴェニャック）
冬の三つの楽しみ－ガスパール・ド・レヴェイヨン伯爵夫人 Trois plaisirs de l'hiver － La vicomtesse Gaspard de Réveillon	1898-1899頃 ドレフュスのための抗議文への署名	レヴェイヨン夫人（モデルはアンナ・ド・ノアイユ、グレフュール伯爵夫人）、ドレフュス
冬の嵐－ブルターニュの思い出 Tempête d'hiver. －Souvenirs de Bretagne	1898.1.10-1898.1.11 エステラジ裁判 軍法会議（シェルシュ・ミディ）	ピカール、エステラジ

「事件をめぐって（Autour de « l'Affaire »）」

断章タイトル	相当するドレフュス事件	事件に関わる人物
15人の判事 Quinze conseillers	1898.11.8-1899.6.3 破棄院（証人喚問） パレ・ド・ジュスティス	ダルトジ（モデルはドレフュス）
ゾラ訴訟－ボワデッフル将軍 Le procès Zola－Le général de Boisdeffre	1898.2.7-1898.2.23(1898.2.9, 2.13) ゾラ裁判 セーヌ重罪裁判所 パレ・ド・ジュスティス	ゾラ、ボワデッフル、ペリュ、ゴンス、ラボリ、ドレフュス
ピカール中佐、軍服で証人席に立つ Le lieutenant-colonel Picquart, en uniforme, à la barre	1898.2.7-1898.2.23(1898.2.11) ゾラ裁判 セーヌ重罪裁判所 パレ・ド・ジュスティス	ピカール、ボワデッフル、ゴンス、ラボリ、カジミール＝ブリエ、ドレフュス、ダンチエ（モデルはダルリュ）
ピカール、平服で、重罪裁判所の法廷に現れる Picquart, en civil, dans la salle des assises	1898.2.7-1898.2.23(1898.2.7) ゾラ裁判 セーヌ重罪裁判所 パレ・ド・ジュスティス	ピカール
哲学者の将校 Un officer philosophe	1898.2.7-1898.2.23(1898.2.11) （ゾラ裁判）	ピカール、民家の女主人（モデルはランヴォワゼ夫人）ダンチエ（モデルはダルリュ）、グリブラン
劇場の裏側 L'envers du Théâtre	1898.2.7-1898.2.23 （ゾラ裁判） オペラ=コミック座	ゾラ、ダルトジ （モデルはレイナルド・アーン）、ピエール・ロチ
真実と意見 La verité et les opinions	1898.2.7-1898.2.23 (1898.2.15-1898.2.17) ゾラ裁判	ポール・メイエ、ジリ、モリニエ、ゾラ、ラポルト、ピナール、ドレフュス、ビヨー、マノ、ブゥトルー、ベルトラン、シゥレル＝ケストナー、

	セーヌ重罪裁判所 パレ・ド・ジュスティス	トラリゥ
軍隊の謎 Mystère de l'armée	1898.11.8-1899.6.3 破棄院（証人喚問） フィガロ紙が議事録を連載(1899.3.31-1899.4.30)	ドレフュス、ボワデッフル、デュ・パティ・ド・クラン
暴露された事実？ Révélation ?	1899.1.3（パレオローグの日記） 破棄院の審理が行われていた頃	ドレフュス、エステラジ、T将軍（モデルはパレオローグ）、ピカール、シュワルツコッペン
サントゥイユ夫人と事件 Mme Santeuil et « l'Affaire »	1898.7.18以降 1898末(Tadié説) 書面審査によるゾラの２度目の有罪判決後か？	サントゥイユ氏（モデルはプルーストの父）、サントゥイユ夫人（モデルはプルーストの母）、ピカール

２　「レヴェイヨン家の人々（Les Réveillon）」

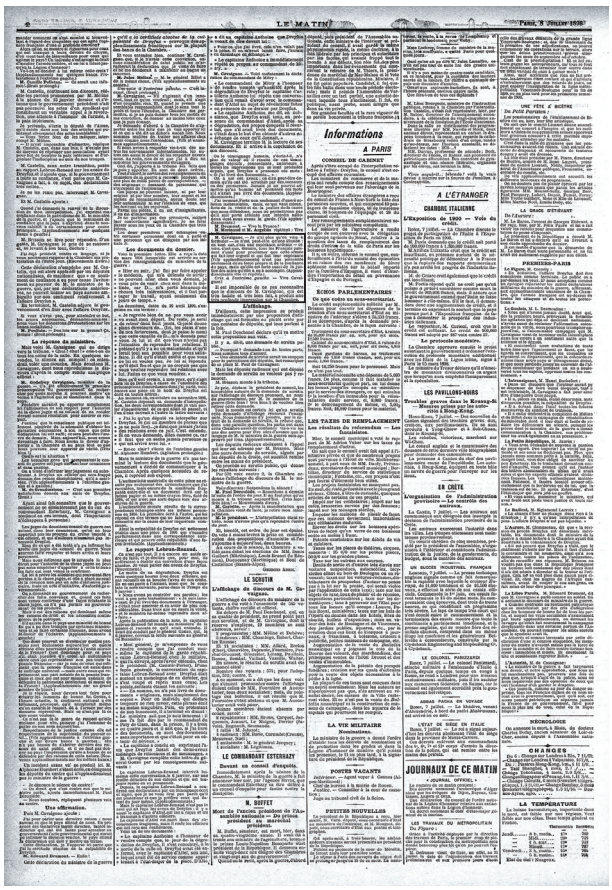
「レヴェイヨン家の人々」の章は、「パリにおけるレヴェイヨン家の人々（Les Réveillon à Paris）」、「美しい季節のレヴェイヨン（Réveillon à la belle saison）」、「季節はずれのレヴェイヨン（Réveillon à la mauvaise saison）」の３つにわけられており、これからとりあげる「レヴェイヨンにて、リュスタンロールとエクスペール=フォンタンの出会い」の断章は、「美しい季節のレヴェイヨン」に、「冬の三つの楽しみ－ガスパール・ド・レヴェイヨン子爵夫人」と「冬の嵐－ブルターニュの思い出」の断章は、「季節はずれのレヴェイヨン」に含まれる。順を追って検討したい。

2-1　「レヴェイヨンにて、リュスタンロールとエクスペール=フォンタンの出会い（A Réveillon, rencontre de Rustinlor et d'Expert-Fontin）」[11]

５ページほどの断章で、ドレフュス事件の話題はその中の１ページ足らずである。ジャンはリュスタンロール先生と出会う。先生は、「文学は、人生の真の感動をただ模倣しようとつとめているにすぎない」、「歴史家も劇作家もタキトゥスもバルザックも、現にいま進行していることよりも強烈なことは何ひとつ描かなかった」、「議会へ行きたまえ、エステラジを眺め、メルシエとピカールの経緯を研究したまえ」[12]とジャンに語る。昔と変わらず「既成の秩序に反対し、冒険の味方」[13]であると自称する氏の、「たとえドレフュスが無罪だったとしても大多数の人の利益のためにそれを隠してドレフュスの有罪を宣言するのが、辛いことではあっても政府の義務だろう」[14]という発言にジャンは呆気にとられてしまう。この断章は以下の記述で終わる。

前の日の新聞が遅れてその日の新聞といっしょに到着した。ちょうどルトゥルヌールが首相に任命されたところで、彼は議会の壇上で、ドレフュス裁判の再審は断固として阻止する覚悟であると言明して、圧倒的多数を獲得したということだった。[15]

ルトゥルヌールという首相は存在しない。おそらく第二次ブリッソン内閣（1898.6.28発足）における陸相カヴェニャックの演説（1898.7.7）をさしていると考えられる。カヴェニャックは、「再審には絶対反対であり、ドレフュスは有罪であるし、有罪のままでなければならないとし、議会においてドレフュス有罪についての絶対的確信を披露する。議会は安堵の胸をなでおろし、拍手で持ってかれの演説をむかえ、直ちに全会場の熱狂のうちにその旨告示することが決議された」[16]とピエール・ミケルは、記している。


LE MATIN

Paris, 8 Juillet 1898

Informations

A PARIS

CONSEIL DE CABINET

A L'ETRANGER

CHAMBRE ITALIENNE

L'Exposition de 1900 — Vols de diamants

LES PAVILLONS-HOTELS

Troubles graves dans le Kouang-Si — Massacres de chrétiens

EN CRÉTE

L'organisation de l'administration provisoire — Les élections autonomes

UN BLOCS MONSTRUEUX FRANÇAIS

LE COLONEL MARCHAND

ARRÊT PRÈS DU VOYAGE

L'ETAT DE SIÈGE EN ITALIE

JOURNAUX DE CE MATIN

CHANGES

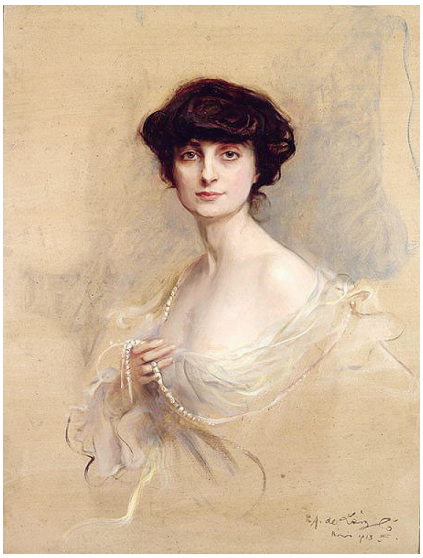
LA TEMPÉRATURE

「マタン」紙　1898年７月８日[17]

実際、カヴェニャックの演説の翌日、７月８日の「マタン」紙には、「拍手喝采（applaudissements）」、「盛大なる拍手（vifs applaudissements）」、「フランス万歳！（Vive la France !）」、「拍手喝采が続く（applaudissements vifs et répétés）」、「左翼席から、カヴェニャック万歳！（Cris à l'extrême gauche－Vive Cavaignac !）」とあり、「非常に巧みで（habile）でよく練られた（très bien fait）カヴェニャックの演説は、議会に深い感銘を引き起こした」[18]と、記事は締めくくられている。

2-2 「冬の三つの楽しみ－ガスパール・ド・レヴェイヨン子爵夫人（Trois plaisirs de l'hiver－la vicomtesse Gaspard de Réveillon）」[19]

厳しい冬の日に、暖かい部屋でぬくぬくと過ごす楽しみと、その季節に恵まれるすばらしい夕食を前段に、レヴェイヨン夫妻が登場する。19歳の女流詩人であるレヴェイヨン夫人については、プルーストの友人である若き詩人アンナ・ド・ノアイユ伯爵夫人の姿が認められる[20]。アンナ・ド・ノアイユもドレフュス支持派であった。



アンナ・ド・ノアイユ伯爵夫人　1913年[21]

９ページの断章のうち７ページが、レヴェイヨン夫人の描写である。魅力的で才能があり詩人の霊感をそなえ、周囲の人たちとかけ離れた夫人の人となりについて、プルーストが念頭においていたのは、「アンナのことなのかあるいはプルースト自身のことでもあったのか」、タディエは、「プルーストが『見出された時』の美学を素描したのは、アンナ・ド・ノアイユを通じてのことであった」としている[22]。

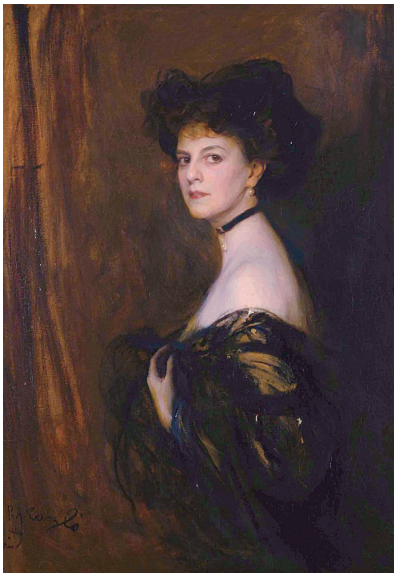
けれども、彼女が口にしないこのようなものの内的本質こそ、じつは彼女にとってほんとうにたいせつな、真に甘美で昂揚した状態へと彼女を投げ込む、唯一つのものだったのである、それは、彼女の詩が常にそうした主題に関係しているところからもわかる。われわれにとって、詩とはまさしく霊感を与えられた瞬間を喚起するものである、霊感を与えられた瞬間というのは（…）過去の瞬間のなかにわれわれの存在が自身に関して残してきたすべてのものの喚起のようなものであり、自身の内的本質（エッセンス）なのである。われわ

れは知らずにその本質（エッセンス）を放っているのだが、あるとき感じたある匂いや、部屋に差し込んでくる同じ一筋の光線は、たちまちわれわれにその本質（エッセンス）を返してくれて、われわれを酔わせ、現実の生活に無関心にさせてしまう。普段の生活のなかではけっしてこの本質（エッセンス）が感じられることはないが、ただしその生活が同時に過ぎ去った生活でもあるときは別で、そんなとき、われわれは一瞬のあいだ現在の圧政から解放され、現在の時間を超えるなにものかを、つまり自身の本質（エッセンス）を感じることになる。[23]

そのレヴェイヨン夫人の、詩とは関係ない知的な気質を示す一例としてドレフュス事件が取り上げられる。

ところで、詩とは関係のない事柄についても、レヴェイヨン伯爵夫人の抱く考えは、必然的にその輝かしい知的な気質から生まれたものであるはずで、それは周囲の人たちの考えることとはかけ離れていたにちがいない、そのために彼女は皆の気持ちをひどく損ねたはずである。彼女は、周囲からは、まるで育ちが悪く、少々おかしな考えを持ち、夫に対して悪影響を与える人物とみなされていた。現に、彼女の夫はドレフュスのための抗議文に署名したではないか？（…）この女性は、宗教や貴族については軽口をたたくし、晩餐には一時間も遅れてくる、執筆をし、フォーブール・サン＝ジェルマンの人ではないような異様な宝石を身につけ、ろくでもない本を書いた大勢の作家を招待し、ドレフュス事件では公然と軍隊に反対の立場を表明して、札つきのアナーキストたちと結託した。（…）だからこそ、若者たちを結婚させるときは十分な注意が必要なのだ、というのも、可哀想に夫は妻にぞっこんで、妻の目を通してしか物事が見られなくなっていたのも無理からぬことであった。[24]

ここには、ノアイユ夫人に加えて、グレフュール伯爵夫人の姿も重なる。



グレフュール伯爵夫人　1905年[25]

1899年にヴィルヘルム２世からベルリンに招待された際、グレフュール伯爵夫人は皇帝にドレフュスのために仲介を頼み込んだと、右翼の新聞、雑誌から糾弾されたというものである。夫人はこのことについてずっと臆病な夫にあてた手紙に、「私たちは誰の世話にもなっていないのですから、勇気を出して自分の意見を表明しなくてはなりません。これは贅沢ですが、これほどの恵まれた贅沢はありません」と誇らしげに書いているとタディエは指摘している[26]。

グレフュール伯爵夫人のこのエピソードは、『ジャン・サントゥイユ』のレヴェイヨン夫人を経て、『失われた時を求めて』においては、ゲルマント公爵夫人へと引き継がれている。

2-3　「冬の嵐－ブルターニュの思い出（Tempête d'hiver. －Souvenirs de Bretagne）」[27]

この断章で描かれるのは、ブルターニュの嵐である。ジャンは夜通し吹き荒れる嵐に夢中になり風の音にうっとりと耳を傾ける。６ページの断章のなかでピカール中佐にかかわる言及が12行だけあらわれる。「たまに風が弱まるように思えると、われわれは風を勇気づけてやりたくなるものである」と、語

りはジャンではなくプルーストになっている。そして風を勇気づけたい気持ちがピカール中佐を勇気づけたい人々の気持ちになぞらえられる。

（…）遠くからピカール中佐を「正義」の擁護者だと心得ている人たちが、直接に彼と知り合いにならないうちは、できるなら彼にこう言いたいと思っているようなものだ、「気を落とさないでください、弱気になってはいけませんよ。エステラジ裁判で意見なしなどと証言したり、丸め込まれてしまったりしないように」と。[28]

エステラジ裁判とは、1898年１月10日から１月11日の軍法会議をさすと思われる。この裁判で、エステラジは無罪となり、ピカールが告発され１月13日には収監されることになる。この一節が、単なるたとえなのか、あるいは、ドレフュス裁判全体を暗に嵐にたとえているのか、ただジャンは、風が鎮まっていくのを聞くと「頑張れ！」と、思わず低い声で言ってしまう。そしてジャンはこの心地よい風が好きである[29]。

この断章は、以下のような考察で締めくくられる。

（…）その瞬間に存在していた現実は、それをあえて求めようとしない限り、さっと吹きつける風や、暖炉の火の匂いや、雨模様でくすんでいながら陽の差している屋根の上の低い空などを不意に思い出すときに、いつかは見出されることをかれは知っていた。それはその瞬間を現に生きている間は、利己的な目的のためにその瞬間を振り向けてしまうので、われわれに感じることのできない現実である。しかし、利害を離れた記憶のなかで、過去が不意に戻ってくるとき、その現実は、過去と現在のあいだに、両者に共通する本質(エッセンス)のなかにわれわれを漂わせる（…）。[30]

『ジャン・サントゥイユ』執筆時期は、プルーストがリアルタイムでドレフュス事件にかかわっていた時期と重なる。「事件」は、『失われた時を求めて』において、「利害を離れて」改めてとりあげられることになる。

３　「«事件»をめぐって（Autour de « l'Affaire »）」

10の断章のそれぞれのタイトルはいかにもドレフュス事件を追っているようであるが、書かれているのは事件の経緯ではない。「Autour de « l'Affaire »」というタイトルが示す通り、「事件」をめぐっての人々の反応や行動とその観察が中心であり、「«事件»の周り、«事件»の周辺」としたほうがより伝わりやすいかもしれない。プレイヤッド版の編者であるクララは、以下のように解説する。

この章はドレフュス事件に多少とも係りのある、互いに独立した10篇の断章を集めたものである。しかしプルーストがここで意図したことは事件の経緯を叙述することではなく、事件を構成する主要な出来事、すなわちゾラ訴訟、ピカール中佐の証言、破毀院が下した判決などを利用して、芸術の本質、精神生活と社会生活といった、かねてからプルーストが深い関心を寄せていた問題を論ずることであった。[31]

この解説を念頭に、「«事件»をめぐって」の各断章を検討したい。

3-1　「15人の判事（Quinze conseillers）」[32]

「«事件»をめぐって」の第一の断章である。ドレフュスを予測させる「ダルトジは」という文で始まるこの断章は、冒頭の７行で裁判の再審の必要性の審議が破棄院（フランスにおける最高裁判所）で始められることになった経緯が述べられる。実際の事件にあてはめるならば、1898年11月８日から1899年６月３日の間の破棄院による証人喚問と審議の時期であると考えられる[33]。

続いて「毎日、正午に審問が始まった」とあるが、審問や審議の内容が語られることはない。

「破棄院大法廷」(1899)シャルル・ドレフュス氏による寄贈[34]

破棄院大法廷（2006）[35]

法廷と法廷を取り巻く情景、法廷の飾り物になったかのような判事たちの描写は一幅の絵画のようである。プルーストの筆は、供述を聞く判事たちの知性を洞察し、その日の天候と判事たちの出廷風景がそれに続く。「空が裁判所の上で青く広がり、壁が金色に、ついで薔薇色になり、大聖堂の色彩が持ちの上に広がって明るく見えるときは、かれらは歩いて裁判所へ行く」、雨が降ると乗合馬車を利用する。

三頭立ての乗合馬車（1890）[36]

天候による出廷経路の変更は、『失われた時を求めて』におけるスワン家の方とゲルマントの方への散歩の経路の選択を連想させる。

さらに、「comme」という直喩で、「眠っているような判事」を「檻のなかのアザラシ」にたとえるとんでもない落差の比喩も、後のプルーストの文体を予告している。

全員が揃うと、眠っているようにみえる一番年をとった判事が、突然、なにかひと言小声で言って、自分たちが起きていることを示し－というのも、なにかをじっと聴いている老人の前にいると、よく頭の白い、小さな目をしょぼつかせている、檻の中のあのあざらしの前にいるように思うことがあるからで、われわれはあざらしの習性を知らないから、かれらがじっと身動きしないでいると、眠っているのかと訝るものだ－判事たちは取り集めたすべての事実から、真実を抽き出そうと努めるのだった。しかし.....[37]

ここでこの章は途切れる。

主人公のジャンは登場しない。

3-2 「ゾラ訴訟－ボワデッフル将軍[38] (Le procès Zola.－Le général de Boisdeffre)」[39]

サンドイッチとコーヒーを入れた水筒を持って重罪裁判所のゾラ訴訟に向かうジャンの様子が生き生きと描かれている。朝、友人のデュリウとともに傍聴に出かけ、夕食後再びデュリウと会って裁判の時間を確認する。ただし、描かれているのは、その場

に居合わせることができたジャンの興奮と熱狂であり、裁判そのものの内容が書かれることはない。

ゾラ裁判は２月７日に始まる。ペインターは「ゾラ裁判が続いているあいだ、プルーストはルイ・ド・ロベールと一緒に毎朝、パレ・ド・ジュステイスの傍聴席に駆けのぼった。法学士号取得試験[40]のときと同じ心地よい不安と精神的緊張を感じ、そのときと同じく、コーヒーとサンドイッチを携えていた」[41]とし、ディースバック、デュシェヌの伝記にも同様の記述がある[42]。

そして、ゾラ裁判で最も影響力のある発言をすることになるボワデッフル将軍が到着する。

審問は将軍の到着を待つために中断された。副官がかれを迎えに走って出て行った。一国の事件に夢中になっている運のいいすべての物見高い人々、このすべての市民たちはアルレー回廊までは入れたが、審問会場へは入れず、ときどき傍聴人が、審問会場に通じる、回廊に出る小さい廊下から出てきて情報をもたらすのを待ち構えている。[43]

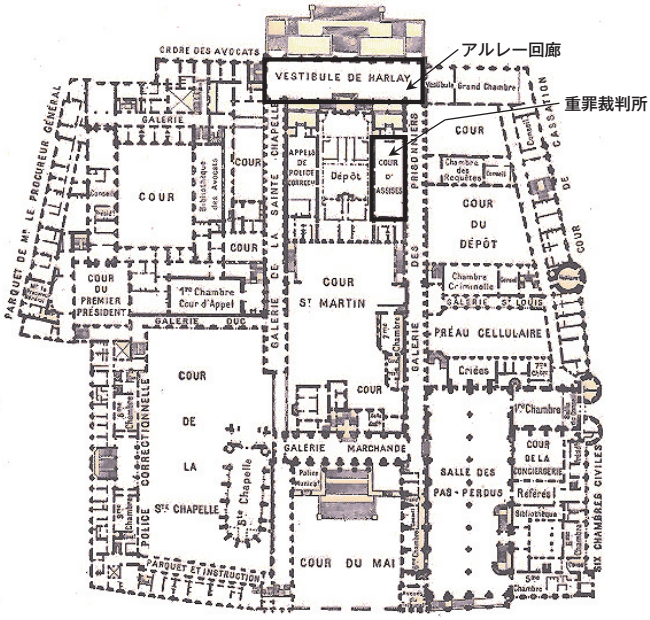
審問会場である重罪裁判所（Cour d'assises）は西北側のアルレー通りから入り、アルレー回廊を通り抜けて左側に位置する。

このアルレー通りに辻馬車が到着し、ボワデッフル将軍が階段を登り、回廊に姿を現す。傍聴人たちは色めき立つ。ボワデッフルを描写するプルーストの筆は冴える。

平服の紳士はひどく背が高かった。そしてとりわけ目についたのは、頭の上に傾いてのっているいやに長いシルクハットだった。傍にいる将校に注意深く耳を傾けている様子で、片足を突っ張らせて、ゆっくりと進んでいった。そして脚が折れてしまったかのようにときおりぱたりと歩みを止めた。外見はまだかなり若かったが、頬は、秋に壁を覆う蔦やある種の苔に似た赤い、あるいは紫がかった薄いかさぶたのようなもので覆われていた。注意深く見つめているような両眼は痙攣でもおこしたようにときおりにまばたいた。またときには手袋をはめていない方の手をあげて、小さな口ひげを

アルレー通りに面した西側のファサード（重罪院の入口）[44]

アルレー回廊（建物西端にある）[45]



パレ・ド・ジュステイス　1899年[46]

引っ張った。もう片方は小さな紙と鉛筆をもっていて、それを外套のポケットにしまった。外套はそうとう着古したらしく、上のボタンがかかっていないので、頸のあたりでたるんでいた。明らかに何かにひどく気を取られているのに、物腰は非常に穏やかで、非常にゆっくりしていた。そしてまばたきする眼の痙攣や、口ひげを引っ張る手が、赤い刺繍のような頬の傷や、外套のだらしなさや、おそらく落馬したときに何度も折ったらしい硬直した脚が、「ボワデッフル将軍」と呼ばれるこの堂々たる人物の特徴であるのが感じられた。そうした特徴は将軍からその偉大さを受け取っていた。というのもかれはその特徴をつねに自分のものとして、自分とともにもっていて、かれが見つめるのはこのまばたきする眼を使ってであり、長すぎる仕事の日々の後で葉巻をふかしたり、コニャックを飲んだりしながら、その頬を金色に、あるいは赤く染めるからだった。かれが通ると、人々は帽子を取った。すると、人の羨望をかきたてる、ひどく丁寧になることで相手の心を和ませようとする、人並み優れた地位の人物、聖職者然とした貴族のように、かれは実に丁寧に挨拶した。が、それでいて、首席裁判長が通ると、かれはみんなと同様に挨拶しなければならなかったので、少しぎこちないその挨拶の仕方や、挨拶の最後に現れた微かな眼の痙攣を見て、とにかく将軍が、市議会議長のようなつまらぬ男にみんなと同じく挨拶しなければならない時を自分では不思議に思っても、やはりかれもそうせざるをえないことを人々は感じ取った。しかしとにかく将軍は挨拶をした。かれはなすべきことを他人より上手に、いっそう丁寧にするすべを心得ていた。[47]

しかし将軍が裁判所に入ろうとしたその瞬間に審問会は閉廷される。将軍は登場し、去っていく。将軍の考えは明らかにされないままである。

ピエール・ミケルは、この場面について、「ボワデッフルの孫にあたる批評家ピエール・ド・ボワデッフルの言によれば、これほど忠実な人物描写は見当たらぬという」[48]と注記している。1994年に出版されたピエール・ド・ボワデッフルの著書『大いなる風に向かって 回想 1368-1968（*Contre le vent majeur, mémoire 1368-1968*）』においてもこの箇所が引用され、ここでは「若きマルセル・プルーストがユーモアを交えて描いている」[49]となっている。

ボワデッフル将軍の正式な証言と審問は２月９日に行われている。しかし、その後の軍人たちの支離滅裂な証言によって裁判は紛糾し、将軍は改めて出廷を求められる。この断章の場面はおそらく、２月17日に急に呼び出されて出廷してきたときの場面であると考えられる。17日の裁判記録には次のようなやりとりがある。

裁判長：（ゴンス将軍に向かって）　付け加えることはありますか、将軍。

ゴンス将軍：いいえ、裁判長殿。

ペリゥ将軍：私の証言を立証するためにボワデッフル将軍の出廷を求めます。

裁判長：明日、将軍の出廷を望むのですか？

ペリゥ将軍：（傍聴席に向かって）　デルカッセ少佐、すぐに馬車でボワデッフル将軍を迎えに行くように。[50]

17日の審問会は、「ボワデッフル将軍がおられないので、審問は明日再開する」[51]という裁判長の宣言で終わる。おそらく、ちょうどこの時間にアルレー通りに到着したボワデッフル将軍をプルーストは描いているようである[52]。

将軍が実際に発言することになるのは翌日の２月18日である。ドレフュスの無罪を知りながらも国と軍の威信を守ることを第一義と考える将軍は次のように宣言する。

「陪審員各位も国民である。国民がもし軍の識者たち、祖国防衛の責任ある指揮者を信頼しなくなるとすれば、この重大な任務を他の人々に委ねざるを得ない。とくと考慮されたい」[53]

ボワデッフル将軍　1893年[54]

「リール」紙　1898年９月17日[55]

ゾラ裁判の行方を決定づけることになるこの発言は、新聞各紙に取り上げられることになる。ラボリ[56]もクレマンソー[57]も状況を逆転することはできず、ゾラと『オーロール』紙の編集長ペランは、3000フランの罰金と１年の禁錮を言い渡される。クレマンソーは「ボワデッフル将軍は法の上に剣をおいた」[58]という発言を残している。

プルーストの文章は、ボワデッフルの宣言にも、クレマンソーの発言にも触れることはない。実際、事件の詳細については、当時は誰もが知っていることであり、繰り返す必要のないことだったとも言える。

3-3 「ピカール中佐[59]、軍服で証人席に立つ（Le lieutenant-colonel Picquart, en uniforme, à la barre）」[60]

引き続きゾラ裁判である。

いかに知性が輝こうとも、いかに感受性が鋭かろうとも、怠惰から、あるいはほかのあらゆる理由から、自分の活動に内的で公平無私の対象をもたない人々が、人生をさまざまに評価するにあたって、ただの形式をひどく尊重することになるということは、精神界における一種の半座である。[61]

国と軍の威信を守るために正義を曲げた人々、あるいは、リュスタンロール氏[62]のようなそれをよしとする人々への糾弾であろうか、「事件をめぐって」三つめの断章は、このように始まる。

世の中にはびこる形式主義について語られたのち、場面はアルレー回廊に移る。回廊にいる人々も気づかずにその形式にどっぷりとつかっている。しかしジャンは法廷にいて、「自分の活動に内的な公平無私の対象をもつ」ピカール中佐（大佐）の話に耳を傾けている。

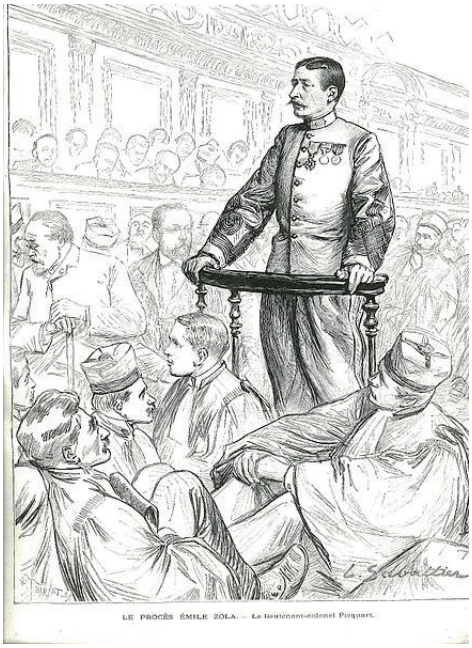
このときのピカールのおかれていた状況をおさえておくと、

1896.8.5	エステラジへの疑惑をボワデッフルに報告
1897.1.7	チュニジアに派遣（左遷）される
1898.1.10-1.11	軍法会議で、エステラジに無罪がいいわたされ、かわりにピカールが告発される。
1898.1.13-	モン・ヴァレリアン（パリの西２km）に60日間収監されることになる（最終的には331日間の収監）
1898.1.13	ゾラが「オーロール」紙に「我、弾劾す」を発表
1898.2.7-2.23	ゾラ裁判
1989.2.26	退役に処せられる（1906年復権）

アルレー回廊はざわついている。ジャンは法廷にいてピカール大佐の話に耳を傾けている。

大佐はジャンの先生であるダンチエ氏の友人であり、またかれと同じく哲学者であって、ライトブルーの軍服を着ているものの、道の曲がり角で馬の手綱を引いたり、閲兵のために駐屯地へ行くかたわら、少しでも強くかれの意識の検証の前に提示されるようなすべての事柄から、知的な推論によって真実をひきだそうとして全生涯を送ってきた人物であった。アフリカから戻ってきた騎兵でもあって、新聞にあらわれる悪意によるほかは、いま法廷を満たしている新聞記者や、敵側や、裁判官たちの世界を知らなかった。何十日も前から、証人用の部屋に、馬が厩舎につながれるように入れられたまま、まだこの重罪裁判所の大きな円形の雛壇を見ていなかったが、いましも名前が呼ばれ、ドアが開かれて、そこに通じる道が開かれたところだった。ちょうど馬から降りても、馬上の北アフリカ騎兵の素早い軽快な歩調を保っているかのように敏捷で、手綱を放し武器を捨てた人のように、どこか悠然としていて、少し眩しそうな驚いた様子できびきびとまっすぐに歩きながら、頭を傾げ、軽い驚きをこめて左右を見、裁判長の前まで進み出ると、立ち止まって敬礼した。それは軍隊式ではなく、はにかみと率直さが入り混じったもので、どの動作にもまるで形式ばった取ってつけたようなところがなく、歩き方や、頭を傾げた様子や、やがて聞くことになる声の響きがそうであるように、一種優雅で繊細な、そして情熱的な人柄がそこにあふれている人の敬礼だった。[63]

ゾラ裁判の頃のピカール中佐[64]



ピカール中佐（セーヌ重罪裁判所1898）[65]

「かれの長い証言のあいだ、からだが始終左右に揺れていた」とあるが、その証言の内容について語られることはない。２月７日から２月23日までのゾラ裁判期間中に、ピカールが証人として出廷するのは、11日、12日、17日、18日、19日の５日間である。裁判記録から、この場面は、おそらく２月11日であると思われる[66]。

この日の裁判記録には、「以上が私が信じるところ、私が申し上げるべきことです」という証言の後に、括弧付きで「熱烈な拍手、深い感銘（Vifs applaudissements – Sensation prolongée）」と書き加えられている[67]。その後も、延々と証人審問が続くが、ピカールの発言は終始穏やかである。

3-4 「ピカール、平服で、重罪裁判所の法廷に現れる（Picquart, en civil, dans la salle des assises）」[68]

ジャンはピカール大佐が出廷するかもしれないことを知っていた。しかし、知ってはいても、その第一日目に（その日はまだ証人たちは召喚されていなかったので、法廷に居残ることができた）、傍にいるひとりの紳士に「（...）あの人がピカール大佐ですよ」と言われたとき、かれは激しい衝撃を受けた。[69]

４つ目の断章だが、この冒頭の文から判断すると、時間的には３つ目の断章より前に位置することになるだろう。証人喚問は２月８日から始まるので、おそらく裁判初日の２月７日であると考えられる。

ジャンはピカール大佐が想像していたのとは違う「金髪ではあったが口髭はなく、どこかイスラエルの技師[70]を思わせる風貌の男であることにかなり失望し、しかし心を奪われもする」。「人の群れのなかを歩き回るこの男のなかには、不思議と捕囚の身であることを示す印はない、(手袋をはめ、シルクハットを被り、捕囚の不幸な様子も、無聊な様子も、諦めた様子もないこの紳士には、出頭するためにいまモン=ヴァレリアンを去ってきたことを示すものは何一つない)」[71]。プルーストは大佐の外見を描きそしてその内面生活へ入り込もうとする。

（…）その男の中には、ジャンが想像していたあらゆる内面生活を示す印がなかった（参謀本部によって犯された司法上の犯罪への憤慨や、義務を最後まで果たそうとする確固たる決意や、それどころか優柔不断や熟慮や良心の葛藤をさえ示すものがひとつとしてなかった）（…）。[72]

ジャンの（あるいはプルーストの）大佐への崇敬の気持ちが伝わってくる。そしてジャンは（あるいは人々は）大佐のおかれているいまの偽りの小康状態に心を痛めている。

3-5 「哲学者の将校（Un officer philosophe）」[73]

ピカール大佐は哲学者ダンチエの友人であったが、かれ自身も哲学者であって、部下の先頭に立って行進するあいだも、その思考力は頭に浮かぶ概念をたえず明らかにしようと努めていた。[74]

５つ目の断章の冒頭は、前々章の文章を繰り返して始まる。

このあと、プルーストは、「かれ（ピカール）が一生を過ごしたいと思ったであろう場所」として、大佐の駐屯地へと思いを馳せ、そこに自分の「幸福な兵役時代」[75]を重ねる。

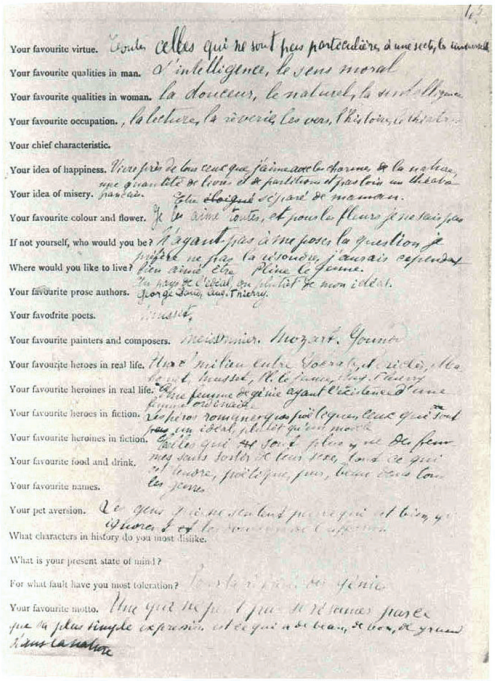
1889年11月、プルーストは志願兵としてオルレアンに赴くが、喘息の発作が仲間たちの迷惑になるということで上官に下宿するよう命じられ、兵舎の向かいのランヴォワゼ夫人宅に住むことになる。「駐屯地で、ピカール大佐は、兵隊を泊める民家の女主人にどれほどよい思い出を残したことかしれなかった」[76]とあるが、ここでプルーストは、ランヴォワゼ夫人を思い浮かべていたのであろう。夫人の名は、書簡集にも見られ、『ジャン・サントゥイユ』の「駐屯地」の章にも現れる。「駐屯地」の章では「幸福な兵役時代」と兵舎の仲間たち、仲間たちを下宿に招待ちパンチを振る舞うなど、書簡集にも確認できるエピソードがとりいれられている。[77]

オルレアン、コリニー兵舎→コリニー行政都市（現在）
（2007年９月３日　筆者撮影）

プルーストが下宿していたランヴォワゼ夫人宅（2007年９月３日　筆者撮影）

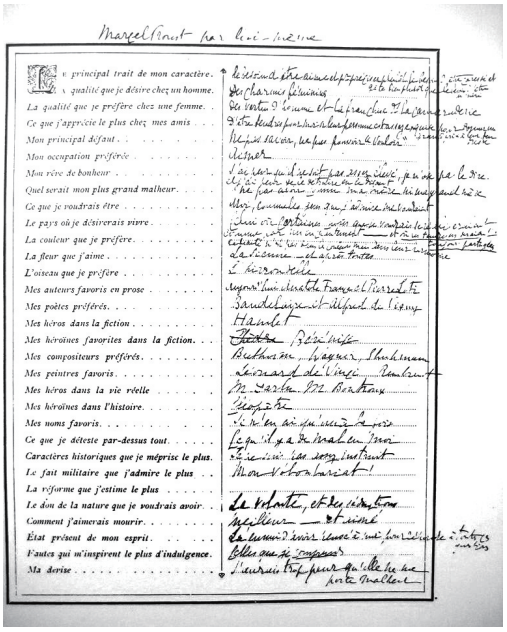
ピカールの本性もまたプルーストに重ねられていく。おそらくピカールは、当時のマルセルにとってのヒーローであり、プルーストは、ピカールの気持ちは自分が一番わかると思い込んででもいるかのようである。「われわれのこうした特徴は、答えなければならない質問帖への簡単な回答のなかにさえあらわれるのだ」として、質問帖に答える自分と審問に答えるピカールが重なっていく。

ここでいう質問帖だが、プルーストが、1886年頃と1890年頃に答えた質問帖のページが残っている。当時流行した「遊び」である。1886年ごろの質問帖の第一問目の「あなたのお気に入りの美徳は？（Your favourite virtue）」という質問に、プルーストは、「一宗派の固有のものではないすべての美徳。普遍的な美徳（Toutes celles qui ne sont pas particulières à une secte, les universelles）」と答えている。裁判の訊問とはかけ離れた遊びの領域ではあるが、15歳（頃）のプルーストの洞察は、すでに核心をついている。



Extrait de l'album anglais d'Antoinette Faure dans lequel apparaît la page remplie par Marcel Proust en 1886.

1886年頃の質問帖[78]



1890年頃の質問帖[79]

この「質問帖」を導入に、質問を受けるピカール大佐が描写される。

青い軍服を着たピカール大佐は、首を肩からすっくと伸ばし、気後れしたようなそれでいてのびのびしたようなようすで判事の前に立ち、質問を受けるたびに、昔と同じように、いつも通り、無意識にその質問を思考によって解明し（…）かれが見つめているそれぞれの人物の立場に身をおき、自分であることをやめ、相手の魂を自分のなかにつくり、その人間が行った行動の方へ、本能的に、必然のように向かおうとしはじめた（…）。[80]

（…）古文書保管人のグリブランに正真正銘の犯罪だと非難されたあと、ピカール大佐は裁判長に召喚され、「古文書保管人のグリブランをどう思うか」と尋ねられたが、そのとき自分に不利な証言を強めるようになるのも覚悟の上で、「誠実な人だと思います。とくに嘘などはつけない人だと思います」と率直に答えたときのように。[81]

この場面は、２月11日の審問記録のなかに確認できる[82]。

生命を真理のために危うくするピカール大佐に、プルーストはソクラテスを重ねる。真の偉大さに対してプルーストは尊敬というよりむしろ親しみと共感を感じている。

3-6 「劇場の裏側（L’Envers du Théatre）」[83]

ジャンはあいかわらずゾラ事件のために、午後は裁判所へ行かなければならなかった。[84]

「«事件»をめぐって」６つ目の断章である。ゾラ裁判については最初のこの１行だけである。

裁判に向かう前に、ジャンは二、三の伝言を届けるためにオペラ＝コミック座に向かう。「かれはヴィクトリア通りから入らねばならなかった」とあるが、オペラ＝コミック座のあたりにヴィクトリア通りはない。じつはドレフュス裁判の時期、オペラ＝コミック座は、火災のために一時的にシャトレ広場に面したナシオン座（現在のテアトル・ド・ラ・ヴィル＝サラ・ベルナール座）に移転していた[85]。セーヌ川をはさんでパレ・ド・ジュスティスとちょうど向かいあう場所に位置し、シャンジュ橋を渡って徒歩で３分ほどである。なるほど北側にヴィクトリア通りもある。

オペラ＝コミック座（テアトル・ド・ラ・ヴィル）からパレ・ド・ジュスティスへの経路[86]

オペラ＝コミック座に入っていくのはジャンだが、そこからプルーストは、ダルトジという劇作者の思念へと入りこみ、その目を通して劇場の舞台裏が描写される。ジャンはこの若い劇作者についてきた友人ということになっている。ちょうどゾラ裁判（1898.2.7-1898.2.23）と同年の1898年３月23日に、レイナルド・アーンによる『夢の島』が、このオペラ＝コミック座で初演されている。登場する劇作者は、プルーストの友人のレイナルド・アーンを想定しているものと考えられている。『夢の島』の原作者であるピエール・ロチもこの場面に登場する。

Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

オペラ・コミック座　『夢の島』1898年[87]

プルーストの視点は、支配人に面会するジャンへと移り、さらにジャンの訪問のせいでオーディションが取りやめになってしまった若い歌手へと移る。プルーストは、その歌手の陰鬱な思念へと入り込み、かれとともに劇場を離れる。青年は「かれが横切る太陽と喜びに溢れた広場にくっきりと暗い影を落とす」[88]。この広場はシャトレ広場ということになるだろう。

シャトレ広場とサラ・ベルナール座 1900年頃[89]

最後の段落は、ふたたび太陽の描写にもどるのだが、それは青年が横切っていったシャトレ広場とは反対側に位置するノートル＝ダム寺院の内部にわずかに差し込む柔らかな太陽である。

しかしながら、太陽はこのときいたるところに差し込んでいた。ノートル＝ダム寺院の内部の広々とした空間のなかへ、わずかな太陽が、それを途中で永久に奪い取るはずだった何枚ものコバルトブルーと鮮血の色をしたステンドグラスを通って、ようやく差し込み、列柱の灰色の石の上で楽しげに休んでいた。一方、列柱のあいだや、その時刻、人気のない側廊や、敷石の広い通路の中央や、敷石の上に、ちらほらと跪いた女の姿があって、戻ってくると、長いこと同じ場所でじっとしているのに再び出会うのだが、そんな女がある姿勢で示していたのは……[90]

ここで、この断章は途切れる。

「列柱の灰色の石の上で楽しげに休んでいる太陽」は、『失われた時を求めて』「土地の名・土地」に現れる「顔のない微笑みを投げかけ」、「柔らかな緑の波のうえで笑い」、「巨人のようにあちこちに寝そべり、身を起こして不規則に飛び跳ねながら陽気に傾斜をくだる」、あるいは「私の部屋に風を避けにやってきて、乱れたベッドの上にくつろいだり、濡れた洗面台のうえに宝石を撒き散らし、あいたトランクのなかに入り込む」バルベックの太陽[91]を想起させるし、教会のなかに跪く女性の姿は、ヴェネチアのサン・マルコ洗礼堂に跪く語り手の母の姿[92]と重なる。

3-7 「真実と意見（La verité et les opinions）」[93]

「«事件»をめぐって」、７つ目の断章である。「取り入れには良い天気ですね」[94]、「散歩に出るのに良い天気ですね」という穏やかな日に、

ジャンはオペラ=コミック座の支配人と別れると、裁判所へ急いだ。かれはポール・メイエ氏、ジリ氏、モリニエ氏の供述を聞くために来たのである[95]。

三氏は、フランス国立古文書学校（École nationale des chartes）の教授であり、ゾラ裁判における証言は、1898年２月15日と２月17日に行われている[96]。プルーストが、三氏の鑑定を毅然とした医者の診断にたとえ、科学者の求める真実を称揚する。

（…）たとえば、ポール・メイエ氏は、おそらくそのときま

でゾラのことなどほとんど気にもせず、わざわざかれのために1分たりとも煩わされたりしなかっただろうし、陸軍大臣の親友だったかもしれない、しかしゾラに真実ありと認めると、楽しげな共感を込めて弁護をし、軍当局のあらゆる圧力、あらゆる論証に対し、幾つもの細い線や曲線についての数々の主張をもって反対し、「誓って申しますが、これはドレフュスの筆跡ではありえません」と結論することになる。このような言葉は聞く者の心を動かす、なぜならこの言葉はただ科学的な規則に従い、この事件についてのあらゆる意見を度外視してなされた推論の結論であると感じるからである。だからそこには一種の誠実さ、ただ一つの真の誠実さが感じられる。というのもある意見の誠実さというものはただただ素朴なものだからである。一方、今ここで人々は、政府と大多数の同僚がポール・メイエ氏に期待していた意見とこうした意見のあいだに、同じく政府と大多数の同僚がピナール氏に期待していた意見とこうした意見とのあいだにはげしい隔たりがあるのを見て、真実というものは現実にそれ自身で存在し、あらゆる意見の外にあるなにかであり、学者が執着する真実は一連の条件によって決定されるのだが、その条件は、もっとも高尚な人間的礼節のなかにさえけっしてなく、事物の本性のなかにあるということを嬉々として感じている（…）弁護するのはかれらを愛しているからではない、かれらに対して反証として挙げられた筆跡がドレフュスのものではないからなのだ。[97]

メイエ氏のゾラ裁判における最初の証言（1898.2.15）は、「ファクシミリをみるかぎり、ボルドローの筆跡はエステラジのものであり、エステラジの筆跡を偽造したものであるとは考えられない」というものである。そしてオリジナルの検証を経て、審問の段階でエステラジの手によるものと断言するにいたる（1898.2.17）[98]。その後は、破棄院（1899.2.2）においても[99]、レンヌ軍法会議(1899.8.30)においても[100]、証言は一貫して変わらない。また、モリニエ氏、ジリ氏ともに、ゾラ裁判の時点で、筆跡はドレフュスのものではなく間違いなくエステラジのものであるとしている[101]。

三人の証言そのものがこの断章のなかで語られることはないが[102]、裁判記録を読みすすめていくと、それぞれ学者たちの丁寧な分析と指摘、そしてそれを証言する口調も含めて、学者としての矜持が感じられる。

最終段落のエピソードは、ふたたび、『失われた時を求めて』を予告するものである。ゾラの文学を嫌悪し、信心深く、ピヨー将軍の友人でもあるメイエ氏が、ゾラに親しげに手を差し伸べ、あるいは、「「オーロール」紙の抗議者一覧表に王政派でキリスト教徒の著名な弁護士の名前を読んで大きな感動を味わった」[103]と書いたプルーストは、『失われた時を求めて』において、ユダヤ人排斥論者だったサズラ夫人をドレフュス支持派にしてブロックの父親を狂喜させ[104]、ゲルマント大公と大公妃のそれぞれに、お互いに内緒でドレフュスのためにミサをあげさせる[105]ことになる。

一方で、この断章の最後でプルーストは、自らに誠実であるために、反ユダヤ主義、ゾラの有罪判決、行政の圧力を理解しようとしながらも、反ユダヤ主義は憎むべきでありユダヤ教徒はキリスト教徒と同じに存在するというブトゥルー氏[106]の手紙、陪審員の心がもう少し広ければゾラを無罪にしていただろうというベルトラン氏の見解、被告側の証人へのマノ氏[107]の敬意に感銘をうける。プルースト自身の[108]、まだ解消されていないアンビバレントな感情を読みとることができる[109]。

3-8 「軍隊の謎（Mystère de l'armée）」[110]

８つ目の断章は次のように始まる。

破棄院がドレフュスの再審請求の審理を終えようとしていたころ、刑事部が行った審問が毎日フィガロ紙に載った。[111]

ドレフュスの再審についての破棄院における証人喚問の記事は、1899年３月31日から1899年４月30日まで毎日掲載される。連日、おおよそ６ページの紙面の１ページから４ページ程度が破棄院における証言と審問の記録であり、日によっては全ページが破棄院関連であったりする。たとえば、４月１日には、

１面から２面にかけて、ドレフュスに最初に嫌疑をかけ有罪へと導いたデュ・パティ・ド・クラン少佐への審問が掲載されている。ピカール中佐への審問の記事は、４月17日から４月19日、４月22日には、ボルドローのコピーとエステラジの筆跡も掲載されている。４月28日から４月30日の最後に掲載される証人はエステラジである。

1894年の「ボルドロー」（上）とエステラジの筆跡（下）
「フィガロ」紙 1899年4月22日[112]

フィガロ紙とクロワッサンとカフェ・オ・レを朝の日課としていたプルーストは、ひと月のあいだ毎日、このドキュメンタリーにどっぷりと浸かっていたようである。「高名な将軍たちがどのような意見を明かすのか」[113]、「二人の大臣や二人の公爵が何を話し合うのかに興味はないがしかし、ボワデッフル将軍が、デュ・パティ・ド・クランとどんなふうに話し合うかを知ることは、想像力の領域で全くの処女地であったところが一部分日の目を見たにひとしいのだ」[114]とある。プルーストは明らかに楽しんでいるようである。

3-9 「暴露された真実？（Révération？）」[115]

「ドレフュスが有罪で、エステラジが、あのエステラジが無罪だなどとフランスで４年間も主張できたとは！　エステラジがねぇ！　しかし将軍、これは本当のことですぞ、あなたはドレフュス事件が決着をみたとき、政局におられましたね。」[116]

クシロン氏のサロンでT伯爵とＴ将軍がドレフュス事件の「真相？」を語るというものである。「いずれ明らかになるが、ドレフュス事件の真犯人はドレフュスでもエステラジでもない。その人の名前を知っているのは当時陸軍大臣だった自分と総理大臣だった　［原文空白］公爵だけだ」[117]というもので、クシロン氏は、自分のサロンが、そのような重要案件の真相暴露の舞台となったことに、夫人ともどもたいそうご機嫌である。プレイヤッド版の注によれば、「ドレフュス事件の間に総理大臣であった公爵はいない」[118]とある。タディエは、真犯人論争は、「パレオローグの意見であり、プルーストはこの発言を聞いた可能性がある」[119]としている。

1899年１月３日のパレオローグ[120]の日記には、「１人目はモーリス・ヴェイユ、２人目はエステラジ少佐、３人目は非常に階級の高い将校」[121]とある。破棄院の審理が新聞に掲載されるのは３月31日であるから、それより以前である。サロンのなかのドレフュス事件である。パレオローグは『失われた時を求めて』に登場する外交官のノルポワ氏のモデルの一人ともされている。

3-10 「サントゥイユ夫人と事件（Mme Santeuil et l’Affaire）」[122]

夕食の支度はまだできていなかった。サントゥイユ氏はサロンで新聞を読んでいた。サントゥイユ夫人は夫と向かい合って、眠っているようにみえた。「ピカール大佐が５年

の禁固刑になるかもしれないそうだ」とサントゥイユ氏が言った。[「なんですって」夫人はそう叫ぶと、さっとからだを起こした。]－「さあさあ、気を落ち着けて」とサントゥイユ氏は妻に皮肉っぽくいった。夫人の顔は、突然、苦しんでいる病人の顔になって、こわばっていた。そして自分をひどく驚かせたものを見せまいとするかのように、また顔を抑えて、自分をかっとさせた叛逆の色を肌の下に戻そうとするかのように、両手で眼を覆った。[123]

この断章も始まりは「事件」である。サントゥイユ夫人が熱烈なドレフュス（ピカール）支持であったこともすぐにわかる。しかしこの後、夫人は自分の思いをすっと落とし込んでしまう[124]。この断章で描かれているのは、愛情深いプルーストの母を想起させるサントゥイユ夫人の人となりである。歴史に残るような重大事件ではない、なにげない日常に入り込んだドレフュス事件の一つの光景である。

結び

保苅瑞穂は、「«事件»をめぐって」について以下のように解説している。

プレイヤード版の編者が述べているとおり、これら10篇の断章は事件の忠実な再現ではないが、政治に関するプルーストの率直な意見やなまな感情を知ることができる点で、前章の「マリの醜聞」とともに貴重な意見である。そうした意見や感情が薄れてしまっている『失われた時を求めて』の場合と比較するとき、これらの断章は一段と興味深い。そうした点から『ジャン・サントゥイユ』の独自な性格に着目したのはジョルジュ・バタイユであって、彼の『文学と悪』(1959)、に収められたプルースト論は一読に値する。[125]

そしてバタイユは、

マルセル・プルーストは、1900年頃には、まだドレフュス事件のことを筆にのせていた。彼のドレフュス派的感情のことは衆知の事実である。ところが、10年ののちに書かれた『失われた時』になると、すでにこの感情も、以前の戦闘的な素朴さを失ってしまっている。(...) 彼がのちに無関心になったのには、もちろんいろいろな理由もあることだろう。彼の性的妄執のことは言わないまでも、彼の属するブルジョア階級が、労働運動の胎動によって脅かされていたということもあるだろう。しかし、この革命主義的な高潔心の衰退には、明晰さもひと役かっていたのである。[126]

としている。なるほど、事件への熱気は「薄れてしまっている」かもしれないし「失われてしまっている」かもしれないが、プルーストは「無関心」になってはいない。『失われた時を求めて』において「Dreyfus」の名は形容詞等も含めて193回、ドレフュス事件に関わる「Affaire 」は23回、「Picquart」の名は14回確認できる。[127]

「ドレフュス事件は分散し、作品全体に散らばり、作品の骨組みとなり」[128]、「時間的に離れることによって、体験したことを語るジャーナリストの視点からではなく、その流れ、枝分かれ、その消えていく様を作品の骨組みの中で捉えることができるようになっていく」[129]、そして「重要なのは、ドレフュス事件が作品の骨格をなしていてほかの糸と絡み合いながらタピスリーを織り上げていくことである」[130]とエミリアン・カラシュスが述べている通りである。

プレイヤッド版の解説でクララは、

これらの断章（「«事件»をめぐって」）は、はドレフュス熱に浮かされて書かれている。ここでプルーストは、審問の印象を書き記し、ピカール、ボワデッフルを見事に素描しているが、しかし、事件が彼にかくも深い共鳴を引き起こしたのは、長く彼のなかにあるモラルの問題が長く彼の心につきまとっていたからである。[131]

としている。おそらく『ジャン・サントゥイユ』執筆当時のプルーストは、不正に対する怒りが、この事件を扱う原動力だと思い込んでいたのかもしれない。ピカール中佐への賞賛が溢れており、ドレフュス事件というよりも、真実を貫くピカールがプルーストのなかで主役を占めているようである。明らか

に地獄島にいるドレフュスよりも、モン・ヴァレリアンに収監されているピカールに想いを馳せている。あるいは正義を貫く科学者たちの英雄物語である。敵は手ごわいボワデッフル将軍である。しかし、一方で、自らに誠実であるために、反ユダヤ主義、ゾラの有罪判決、行政の圧力を理解しようとするアンビバレントな心情ものぞかせる[132]。

この心情は、『失われた時を求めて』における、ドレフュス派の弁護士レナック氏[133]について、「本人はもしかすると己が出自によって操られていたのかもしれない」[134]とし、あるいは、「ブロックは、ドレフュス支持を自ら理詰めで選んだものと信じていたが（...）理性もまた自分の選んだのではないある種の法則に従っているのだ」[135]という言及につながる。正義を信じるサン＝ルーのドレフュス支持にも、ユダヤ人である愛人ラシェルの出自が影響していないとは言えない。それは本人も気づかぬうちに現れ出てくるものなのである。

『ジャン・サントゥイユ』の冒頭で、

この書物を小説と呼べるであろうか？　それ以下かもしれないし、それ以上かもしれない。それが裂け目から溢れ出てくるときに、何もそこに混ぜることなく、摘み取られた私の人生の本質（エッセンス）そのものである。この書物は決してつくられたのではなくて、収穫されたのだ。そしてこれは怠惰な私の言訳ではない。（...）[136]

とプルーストは記している。タディエは、「この書物は決して作り上げられたのでなく、収穫されたのだ」というところに、すでに将来の挫折（échec futur）の主たる原因が含まれているとし、収穫されたばらばらの夥しい断章を「組み立て、有機体として関連づけるという課題が残っていた」と指摘する[137]。しかし、挫折ととるよりも、来るべき書物への第一段階であり、来たるべき書物を予告しているととらえたい。収穫されたものがなければ、次の段階に進むことはできない。そして、収穫された素材がそのままに描かれていた『ジャン・サントゥイユ』の正確なクロッキーから、何かを明かす（révératrice）意味のあるものが抽出されていくことになる[138]。2-3「冬の嵐」にも引用したが、「この瞬間に存在している現実は、その瞬間を現に生きている間は、利己的な目的のためにその瞬間を振り向けてしまうので、われわれに感じることのできない現実である。しかし、利害を離れた記憶のなかで、過去が不意に戻ってくるときには、その現実が、過去と現在の間の、両者に共通する本質（エッセンス）のなかにわれわれを漂わせる」[139]ことを『ジャン・サントゥイユ』の時点でプルーストは予感している。そして「つくらない」ことが「怠惰」ではないことをすでに宣言している。ドレフュス事件で収穫された現実は「利害を離れて」深く沈潜し、『失われた時を求めて』において現れ出てくるのである。

1997年に、シンガーソングライターのイヴ・デュテイユが「ドレフュス」という美しい曲を発表している。アルフレド・ドレフュスはデュテイユの大叔父にあたるということである。2013年にロバート・ハリスによるドレフュス事件を題材とした小説「An officer and a spy」がイギリスで出版され（「D.」というタイトルでナタリー・ジンマーマンによってフランス語に翻訳）、2019年「J'accuse」（英語タイトル「An officer and a spy」）としてロマン・ポランスキーによって映画化された。2019年ヴェネチア国際映画祭、銀獅子賞（審査員グランプリ）受賞作品である[140]。ポランスキーの父はユダヤ教徒のポーランド人であり、母親はカトリック教徒のポーランド人である。深く沈潜していた要素が、そしてそれが本人にとって負の要素であればなおさら、それでも作品に現れ出るとき、作品は非常な強度をもつことになる。

プルーストにとってその負の要素はユダヤの問題であり、同性愛であった[141]。そしてプルーストはそれを自覚しつつ、『失われたと木を求めて』においてそのメッセージを三本の木に託した。主人公はユダヤ人ではないし、主人公には同性愛が見えていない、読み手は語り手の語らないこたえをテクストから読み取ることになる[142]。

1994年、大江健三郎がノーベル文学賞を受賞した時のフィリップ・ポンスのインタビューへのこたえがある。

ポンス：あなたの小説はあなたの障害者の息子である光を中心にしている。この息子がいなかったらあなたは同じような小説を書いていただろうか？
大江：ある批評家がかつて、大江健三郎は、光がいなければ存在しなかっただろうと言った。30年来、私の小説は二つのテーマの周りを回っている、核の脅威と障害者の息子との生活である。しかし、何について書くかは結局のところ重要ではない。無からでも、ほんの些細なテーマからでも、たまたま見つけた主題からでも、普遍に至ることはできる。[143]

25年前にこの記事を読んだとき、私は大江のこの回答に快哉を送ったのだが、いま、改めて読み返して、ふと立ち止まった。「けだし天才とは、映し出す能力にあるのであって、映し出された光景に内在する資質にあるのではない」（註８参照）とプルーストも言っているように、おそらくハンディキャップの息子と先の戦争がなくても、大江は書いているだろう。しかし、「無も、些細なテーマも、たまたま見つけた主題も」、自らの根源的なテーマのなかで熟成されたとき初めて、強度をもって現れ出てくる。

ユダヤの問題がなくとも、同性愛の問題がなくとも、プルーストはやはり書いていただろう。しかし『失われた時を求めて』の底から現れ出てくる、主人公には読み取ることができなかった「三本の木」が伝えようとした二つのメッセージは、作品の骨組みとなり、『失われた時を求めて』を作品たらしめる強度を保証するものである。

最後にひとつ。同時代の流行に乗りながらもプルーストは常に異色である。フェルメール再発見当時、フェルメールにかかわる数多くの文章が著されたなかで、今なお、引用されるのがプルーストの「黄色い壁」であるように（フェルメールの黄色を指摘しているのはプルーストだけである）、『ジャン・サントゥイユ』に描かれる「ドレフュス事件」周辺のスケッチもまた、当時の数限りなくある事件を取り扱う文章のなかで、そのほかのドキュメンタリーとは視点の異なるものであり、プルーストが没にしてしまったものであるにもかかわらず、21世紀の現在も色あせず新鮮であることを付け加えておきたい。

略記

I, II, III, IV：
Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade) I～IV vols.1987-1989.

JS :
Marcel Proust, *Jean Santeuil* précédé de *Les Plaisirs et les jours*, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade) 1971.

CSB :
Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve* précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade) 1971.

Correspondance :
Correspondance de Marcel Proust, texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, I～XXI, Plon, 1970-1993.

註

1 青柳りさ「プルーストと中動態の世界(1)－「ある親殺しの感情」をめぐって－」金沢美術工芸大学紀要 N°63 pp. 107-121.
2 « Sentiments filiaux d'un parricide », *Le Figaro*, 1er février, 1907, p.1.
3 A Gaston Calmette, soir 1er février 1907, *Correspondance*, VII, p.56. 強調は筆者による。以下同様。
4 「ああ、私は知らなかったのだが、そのとき祖母の心を悲しく占めていたのは、夫の些細な不摂生よりもはるかに、私の意志の欠如、虚弱な体質、それらが私の将来に投げかける不安だったのだ […]。」(I, p.12)
「かくして、はじめて、私の悲しみはもはや罰すべき過ちではなく、意図せざる病とみなされ、私には責任のない神経症状であると公式に認められたのである」(I, p.37)
5 « Et alors l'écrivain se rend compte que si son rêve d'être un peintre n'était pas réalisable d'une manière consciente et volontaire, il se trouve pourtant avoir été réalisé et que l'écrivain lui aussi a fait son carnet de croquis sans le

savoir.»（IV, pp.478-479）

6 *JS*, p.983.

7 「しかしながら天才は、いや傑出した才能でさえ、他の人より優れた知的要素や社会的洗練からとより、むしろそれらを変形し置き換える能力から生まれる。電球で液体を温めるには、できるだけ強力な電球を用いればよいというのではない、光を出すのをやめて方向を変え、光の代わりに熱を出すような電球を用いなければならない。空中を飛翔するには、もっとも馬力のある自動車ではなく、地上を走り続ける代わりに、走ってきた水平線を垂線に切り替え、水平のスピードを上昇する力に変換できる車が必要なのである。同じように、天才的作品を生み出すのは、このうえなく洗練された環境で暮らし、華々しい会話を繰り広げ、広範な教養をそなえた人たちではなく、自分自身のためにのみ生きることを突然やめて、自らの人格を鏡のようにする能力を獲得した人たちである。そうすることで、その人生が、社交的、ある意味では知的次元においてさえも、いかに凡庸であったにせよ、その人生を鏡に映し出すことができる。けだし天才とは、映し出す能力にあるのであって、映し出された光景に内在する資質にあるのではない。若きベルゴットが少年時代を過ごした悪趣味なサロンと、そこで兄弟たちと交わした面白くもない会話を読者の世界に見せることができた日、その日にこそベルゴットは、自分よりずっと才気に溢れ卓越した家族の友人たちより、遥か高みに上ったのである。その友人たちは、ベルゴッド家の人々の卑俗さにいささかの軽蔑を示しながら、立派なロールスロイスに乗って家路につくかもしれない、だがベルゴットはといえば、ようやく「離陸」した自分のささやかな機体を操り、友人たちの上空を飛翔しているのである。」（I, pp.544-545）

8 *JS*, pp.403-539.

9 *JS*, pp.619-659.

10 「«事件»をめぐって（Autour de « L'Affaire »）」は、ドレフュス事件に関わる10の断章から構成されている。とはいっても、のちにプレイヤッド版の編者によって、ドレフュス事件に関わる断章がまとめられたものである。「レヴェイヨン家の人々」、「«事件»をめぐって」というタイトルも含め、本論でとりあげる断章のタイトルも及びその順番もプレイヤッド版編者によるものである。

11 *JS*, pp.480-485.

12 *JS*, pp.480-481.

13 *JS*, p.482.

14 *JS*, p.485.

15 *JS*, p.485.

16 ピエール・ミケル（渡辺一民訳）『ドレーフュス事件』白水社（文庫クセジュ）1990年p.76.

17 *Le Matin*, le 8 juillet 1898, p.2. Source : gallica.bnf.fr / BnF

18 « Il est impossible de ne pas reconnaître que le discours de M. Cavaignac, qui est très habile et très bien fait, a produit une très profonde impression sur la Chambre. » ただし「habile / très bien fait」という言い回しからは、記者がカヴェニャックの演説に完全に同調しているようには思えない。

19 *JS*, pp.518-527.

20 Cf.『プルースト全集12』筑摩書房　1985年　p.408.

21 *Anna-Elisabeth, comtesse de Noailles* par Philip Alexius de László, 1913. https://fr.wikipedia.org/wiki/（2019.11.2）

22 Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust*, Gallimard, 1996, pp.402-404.
ジャン＝イヴ・タディエ（吉川一義訳）『評伝プルースト』上・下　筑摩書房　2001年

23 *JS*, p.521.

24 *JS*, p.524.

25 *La comtesse Greffuhle* par Philip Alexius de László, 1905. https://fr.wikipedia.org/wiki/（2019.11.2）

26 Jean-Yves Tadié, *op. cit.*, p.390 ; Anne de Cossé-Brissac, *Comtesse Greffurhe*, Perrin, 1991, p.166 *sq*.

27 *JS*, pp.531-537.

28 *JS*, p.533.

29 *JS*, p.533.
プルースト自身は、1898年１月13日以前にルイ・ド・ロベール及びピエール・ロチによってピカール中佐に紹介されている。（*Correspondance*, XI, «A Louis de Robert, [peu après le 28 octobre 1912]», p.268 ; Note 13, p.270）

30 *JS*, pp.536-537.

31 『プルースト全集13』保刈瑞穂訳　筑摩書房　1985年 p.376.（*JS*, Note, p.1059）

32 *JS*, pp.619-620.

33 「未完の断章である。ドレフュスはここではダルトジの名前で呼ばれている。この法廷の場面はおそらく1899年ごろ、すなわち破棄院が第一回のドレフュスの有罪判決を破棄し、判決を＜レンヌ軍法会議に差し戻した時期と思われる」（*Op.cit.*,『プルースト全集13』p.377 *JS*, p.1059）
1898年10月29日に破棄院は再審請願を受理する旨を発表。11月８日より審議が始まり、1899年６月３日に判決を破棄、軍法会議の再審を命ずる。

34 Grand' chambre de la Cour de cassation. Dessin de L. Sabattier（1899）. Don de M. Charles Dreyfus.（Fonds de la Cour de cassation relatif à l'affaire Dreyfus）
https://www.courdecassation.fr/venements_23/colloques_4/2006_55/cassation_relatif_9155.html（2019.10.23）

35 Grand'chambre de la Cour de cassation（2006）
https://www.courdecassation.fr/venements_23/colloques_4/2006_55/cassation_relatif_9155.html（2019.10.23）

36 Omnibus à impériale à trois chevaux de La Compagnie Générale d'Ominibus（CGO）vers 1890, ligne D, Filles-du-Calvaire/Les Ternes. Photographe anonyme.
https: //commons. wikimedia. org/wiki/File: Omnibus_a_

chevaux_vers_1890_CGO_Paris.jpg（2019.10.23）

37 *JS*, p.620.

38 Raoul le Mouton de Boisdeffre（1839-1919）フランスの軍人、将軍、ドレフュス事件の時の参謀総長。

39 *JS*, pp.620-627.

40 『ジャン・サントゥイユ』では「バカロレア」である。

41 George D. Painter, *Marcel Proust 1871-1903 : Les années de jeunesse*, Mercure de France, 1966, p.288.

42 Cf. Ghislain de Diesbach, *Proust*, Perrin, 1991, p.237 ; Roger Duchêne, *L'impossible Marcel Proust*, Robert Laffont, 1994, p.339.
プルーストは、「1898年２月７日月曜より少し前」に、ピエール・ラヴァアレに宛てた書簡で「２時前にゾラについての返答を」と書き送っている。検察官であるラヴァレの叔父にゾラ裁判の傍聴の便宜をはかってもらうためである。*(Correspondance*, II, «A Pierre Lavalée, [peu avant le lundi 7 février 1898]», p.225 ; Note 2, p.226）

43 *JS*, p.623.

44 Façade rue de Harlay, entrée de la Cour d'asssises（photo prise en 2011）
https://fr.wikipedia.org/wiki/Palais_de_justice_de_Paris#/media/Fichier:Palais_Justice_Paris.jpg（2019.10.24）

45 Le hall de Harlay, à l'extrémité ouest du palais（photo prise en 2015）
https://fr.wikipedia.org/wiki/Palais_de_justice_de_Paris#/media/Fichier:Vestibule_de_Harlay_du_Palais_de_justice_de_Paris.JPG（2019.10.24）

46 Palais de Justice de Paris（Plan du premier étage, 1889）
http: //www. cosmovisions. com/monuPalaisJustice. htm（2019.10.24）

47 *JS*, pp.624-625.

48 ピエール・ミケル *op.cit.,* p.69.

49 Pierre de Boisdeffre, *Contre le vent majeur, mémoire 1368-1968*, Grasset, 1994, p.58.

50 «Audience du 17 février», *L'Affaire Dreyfus, Le Procès Zola, 7 février-23 février1898 devant la cour d'assises de la Seine, Compte rendu sténographique «in-extensos»*, Stock, 1998, p.718.

51 *Ibid*, p.722.

52 タディエは、この断章の場面について、「２月９日の出来事で将軍は実際には制服姿で証言したのにプルーストは平服で描いている、小説家としての楽しみだろうか」としている。おそらく審問の２月９日には将軍は制服で出廷したが、この日は、正式ではない急な呼び出しに、平服で現れたと考える方が自然だろう。（Jean-Yves Tadié, *op. cit.*, pp.372-373）

53 «Vous êtes le jury, vous êtes la nation. Si la nation n'a pas confiance dans les chefs de son armée, dans ceux qui ont la responsabilité de la défense nationale, ils sont prêts à laisser à d'autres cette lourde tâche, vous n'avez qu'à parler. Je ne dirai pas un mot de plus. Je vous demande la permission de me retirer, monsieur le Président.»（Audience du 18 février）*L'Affaire Dreyfus, Le Procès Zola, 7 février-23 février1898 devant la cour d'assise de la Seine, op.cit.*, p.724. ; ピエール・ミケル *op.cit.,* p.69.

54 Le général de Boisdeffre en 1893. Source : gallica.bnf.fr / BnF

55 Le général de Boisdeffre, alors chef d'Etat-Major général, défendant l'honneur de l'armée, caricaturé par Charles Léandre lors de l'affaire Dreyfus, dans *Le Rire*, 17 septembre 1898.
https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/rire1897_1898/0556/image（2019.10.24）

56 Fernand Labori（1860-1917）ドレフュスとゾラの弁護士。

57 Georges Clemenceau（1841-1921）政治家、ジャーナリスト、首相（1906-1909）。「オーロール」紙を主幹しドレフュス擁護の論陣を張る。

58 Georges Clemenceau, «Vainqueurs et Vaincus» in *L'Aurore*, 25 février 1898, p.1.

59 Marie-Georges Picquart（1854-1914）フランスの軍人。「ボルドロー」（スパイ事件の証拠となる明細書）の筆跡がドレフュスのものではなくエステラジのものであることを軍に報告。事件当時は中佐。プルーストは中佐（lieutenant-colonel）としたり大佐（colonel）としたりしている。

60 *JS*, pp.627-634.

61 *JS*, p.627.

62 Cf. 本論2-1「レヴェイヨンにて、リュスタンロールとエクスペール=フォンタンの出会い [A Réveillon, rencontre de Rustinlor et d'Expert-Fontin]」

63 *JS*, pp.632-633.

64 Le lieutenant-colonel Picquart au moment de l'affaire Dreyfus et des procès Zola.
https://fr.wikipedia.org/wiki/Marie-Georges_Picquart#/media/Fichier:Picquart_2.jpg（2019.10.26）

65 *L'Illustration*, n°2869, 19 février 1898.
Croquis d'audience du lieutenant-colonel Marie-Georges Picquart, témoignant au procès d'Emile Zola.（visible à gauche, de profil）devant la Cour d'assises de la Seine à Paris en 1898. *L'Illustration*, gravure par Sabattier et Thiriat.
https: //fr. wikipedia. org/wiki/%C3%89mile_Zola_dans_l%27affaire_Dreyfus#/media/Fichier: LtcolPicquart. jpg（2019.10.26）

66 «Audience du 11 février», *L'Affaire Dreyfus, Le Procès Zola, 7 février-23 février1898 devant la cour d'assises de la Seine, op.cit.*, pp.306-373.

67 *Ibid.*, p.324.

68 *JS*, pp.634-636.
69 *JS*, p.634.
70 「ピカールは長い口髭をはやしていた」(*JS*, p.1062) とプレイヤッド版の注にある。図版で示した裁判当時の写真、デッサンの通りである。またこの断章では、ピカールの風貌について「イスラエルの技師（ingénieur islaélite)」という表現が二度出てくる。『ジャック・プティへのオマージュ』のなかで、「ピエール・テルミエ（1859-1930）の友人、若きイスラエルの技師」として紹介されるラウル・シモン（Raoul Simon）をイメージしているのかもしれない。(*Hommages à Jacques Petit*, réunis par Michel Malicet, vol.1, Annales Littéraires de l'Université de Besançon & Les Belles Lettres, p.133）レオン・ブロワは『貧しき者の血（*Le Sang du pauvre*)』の第18章「L' avoué de Saint Sépulcre」をラウル・シモンに献じている。
71 *JS*, p.635.
72 *JS*, p.635.
73 *JS*, pp.637-643.
74 *JS*, p.637.
「大佐はジャンの先生であるダンチエ氏の友人であり、またかれと同じく哲学者であって、ライトブルーの軍服を着ているものの、道の曲がり角で馬の手綱を引いたり、閲兵のために駐屯地へ行くかたわら、少しでも激しくかれの意識の検証にかけられるすべての事柄から知的な推論によって、真実をひきだそうとして全生涯を送ってきた人物であった」 *JS*, p.632.
75 Clovis Duveau, «Proust à Orléan» in *BAMP*, n°33, 1983, p.16.
76 *JS*, p.638.
77 Cf. 青柳りさ「モンタルジからロベール・ド・サン＝ルー＝アン＝ブレヘ－『失われた時を求めて』における人の名－」金沢美術工芸大学紀要 N°52 2008 pp.62-63.
78 https://www.amisdeproust.fr/fr/（2020.1.16）
79 https://lecturesdudimanche.com/2017/07/11/tag-questionnaire-de-proust/（2020.1.16）
80 *JS*, p.639.
81 *JS*, p.640.
82 «Audience du 11 février», *L'Affaire Dreyfus, Le Procès Zola, 7 février-23 février1898 devant la cour d'assises de la Seine, op.cit.*, pp.353.
83 *JS*, pp.644-648.
84 *JS*, p.644.
85 1897年５月25日の火災により閉鎖、1898年12月７日に再開。
86 Source : google.com/maps（2019.11.1）
87 Théâtre National de l'Opéra-Comique. *L'île du rêve, idylle polynésienne* de MM. Pierre Loti, André Alexandre et Georges Hartmann, musique de M. Reynaldo Hahn : [estampe] / dessin de M. Paul Destez ; gravure de Reymond Source : gallica.bnf.fr / BnF
88 *JS*, p.648.
89 Paris, Place du Chatelet et Théâtre Sarah Bernhardt. https: //www. cpa-bastille91. com/plan-et-theatre-sarah-berhardt-place-du-chatelet-paris/（2019.11.1）
90 *JS*, p.648.
91 II, pp.33-34.
92 IV, pp.224-225.
93 *JS*, pp.648-651.
94 ゾラ裁判は２月である。«Volilà un beau temps pour les moissons.» と言っているのは、この時期に収穫される穀物があるのか、あるいは収穫でもしたくなるようなお天気だと言っているのか、あるいはフィクションなので実際の裁判の時期にこだわっていないのか。
95 *JS*, p.649.
96 プレイヤッド版の注では、「1899年、破棄院は、フランス国立古文書学校の学長であるポール・メイエ氏、教授であるジリ氏、モリニエ氏に、新たに筆跡鑑定を依頼し、かれらは「ボルドロー」の筆跡がドレフュスのものでないことを結論づけることになる」(*JS*, p.1064) としているが、この場面は1898年のゾラ裁判を想定したほうがよいだろう。なお、三氏は、ゾラ裁判（1898年)、破棄院（1899年)、レンヌ軍法会議（1899年）の３回にわたって証言を行っている。
97 *JS*, pp.649-650.
98 Louis Leblois, *L'affaire Dreyfus, l'iniquité la réparation, les principaux faits et les principaux documents*, Aristide Quillet, 1929, pp. 155-161; *L'Affaire Dreyfus : Le procès Zola, Devant la Cour d'Assises de la Seine et la Cour de Cassation* (7 février-23 février 31 mars-2 avril 1898), I, Au Bureau du "Siècle" / Stock, 1898, pp.496-508.
99 *Le Figaro*, N°112, 22 avril 1899, pp.3-4.
100 Conseil de Guerre de Rennes, *Le Procès Dreyfus*, N°3, Stock, 1900, pp.1-17.
101 Louis Leblois, *op.cit.*, pp.162-163.
102 「誓って申しますが、これはドレフュスの筆跡ではない」という言葉があるが、ただしメイエはそのような発言はしておらず、ジリ、その他の証言者にこれに近い表現がみられる。
103 *JS*, p.651.
104 II, pp.586-587.
105 III, pp.106-107.
106 Emile Boutrouox（1845-1921）　哲学者
107 Jean-Pierre Manau（1822-1908）　ゾラ裁判、破棄院の検事長
108 Jean-Yves Tadié, *op.cit.*, p. 374.
109 Cf. Yuji Murakami, « L'affaire, Dreyfus dans *Jean Santeuil* », Etudes de langue et littérature françaises, volume 97 (2010) po.77-91.
110 *JS*, pp.651-654.
111 *JS*, p.651.

112 *Le Figaro*, N°112, samedi 22 avril 1899, p.2. Source : gallica.bnf.fr / BnF（2019.11.1）
113 *JS*, p.652.
114 *JS*, p.654.
115 *JS*, pp.654-657.
116 *JS*, p.654.
117 *JS*, p.655.
118 « Aucun duc n'a été président du Conseil pendant l'affaire Dreyfus. »（*JS*, p.1065）
119 Jean-Yves Tadié, *op.cit.*, pp.374-375.
120 Maurice Paléologue（1859-1954）外交官、歴史家、随筆家。
121 Maurice Paléologue, *Journal de l'affaire Dreyfus 1894-1899*, Plon, 1955, p.156.
122 *JS*, pp.657-659.
123 *JS*, p.657.
124 プルーストの父は反ドレフュス派であり、母とマルセルと弟のロベールはドレフュス派であった。
125 *Op.cit.*,『プルースト全集13』pp. 376-377.
126 ジョルジュ・バタイユ（山本功訳）『文学と悪』ちくま学芸文庫 pp.206-208.
127 「Dreyfus」108回、「dreyfusard(e)(s)」47回、「dreyfusien」1回、「dreyfusisme」27回、「dreyfusiste(s)」8回、「affaire」23回である。
128 Emilien Carassus, « L'affaire Dreyfus et l'espace romanesque : de *Jean Santeuil* à *la Recherche du temps perdu*, *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 71ème Anneé No. 5/6, Marcel Proust（Sep.-Dec., 1971）, PUF, p.841.
129 *Ibid*, p.842.
130 *Ibid*, p.849.
131 *JS*, p.985.
132 *JS*, p.651.
133 Joseph Reinach（1856-1921）政治家、弁護士、ジャーナリスト。
134 « M. Reinach manœuvrait par le sentiment des gens qui ne l'avaient jamais vu, alors que pour lui l'affaire Dreyfus se posait seulement devant sa raison comme un théorème irréfutable et qu'il démontra, en effet, par la plus étonnante réussite de politique rationnelle（réussite contre la France, dirent certains）qu'on ait jamais vue. En deux ans il remplaça un ministère Billot par un ministère Clemenceau, changea de fond en comble l'opinion publique, tira de sa prison Picquart pour le mettre, ingrat, au Ministère de la Guerre. Peut-être ce rationaliste manœuvreur de foules était-il lui-même manœuvré par son ascendance. »（II, pp.592-593）
135 Ⅱ, p.593.
136 *JS*, p.181.
137 Jean-Yves Tadié, *op.cit.*, p.346.
138 Mireille Marc-Lipiansky, *La naissance du monde proustien dans Jean Santeuil*, Nizet, 1974, p.29.
139 *JS*, p.537.
140 「パリ・マッチ」紙の映画『J'accuse』を紹介する記事の小見出しに「彼のヒーローは、ユダヤ人嫌いのカトリック教徒である」とある。『J'accuse』の主役はピカールであるようである。筆跡鑑定をしたメイエ氏もユダヤ人が嫌いであった。プルーストにとってもヒーローはピカールであり、メイエ氏であった。« Son héros est un catholique qui n'aime pas trop les juifs. »（*Paris Match*, le 2 novembre 2019）
141 2019年10月、おそらくは『楽しみと日々』の原稿であり、同性愛という主題のために削除されたと考えられるプルーストの未発表原稿がリュック・フレスによって出版された。ここにもまた初期原稿から『失われた時を求めて』への沈潜し現れ出てくる作品の骨格を探ることができるかもしれない。（Marcel Proust, *Le Mystérieux Correspondant et autres nouvelles inédits*, édition Luc Fraisse, Fallois, 2019）
142 Sophie Basch, « Théodore Rousseau et les trois arbress d'Hudimesnil（sur une référence picturale de Proust）», L'École des muses. Marcel Proust et les arts, Actes de la journée d'études du 22 mars 2017 organisée par Jean-Yves Tadié, Paris, Institut de France, Académie des Beaux-Arts, 2017, p. 73.
143 « – Vos romans sont centrés sur vos relations avec Hikari, votre fils handicapé. Auriez-vous écrit les mêmes romans sans cet enfant ? – Un critique a dit un jour que sans Hikari, Kenzaburô Oe n'aurait pas existé. Depuis trente ans, mes romans ont tourné autour de deux thèmes : la menace nucléaire et la vie avec un enfant handicapé. Mais ce sur quoi on écrit n'a finalement pas d'importance. A partir d'un rien, d'un thème trivial ou d'un sujet trouvé au hasard, on peut atteindre l'universel. » *Le Monde*, 1994.10.16.

（あおやぎ・りさ　一般教育等／フランス文学）
（2019年11月7日　受理）